

【翻 訳】

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第二十章～第二十一章*

堀 智 弘

第二十章 見習い生活

逃亡の試みによって失われたものはなし。同士たちはもとの家に戻る。作者が送り出された理由。ボルチモアへの帰還。「トミー」とその黒人の連れの境遇の対比。ガードナーの造船所での試練。生きるか死ぬかの争い。その原因。白人と黒人の労働者間の対立。暴行の説明。黒人の証言はなんの重きもなさない。主人ヒューのふるまい。ボルチモアにおける奴隷制の風潮。作者の状況が改善する。新たな仲間たち。奴隷の賃金を奪う奴隷所有者の権利。満足した奴隷を作る方法。

さて！親愛なる読者よ、前章で述べた全面的な騒ぎによって、わ

たしが敗者となったとあなたはすでに推測されたかもしれないが、そうではない。この身内での小さな革命は、だれかの背信——あえてだれとは言わないし考えようとも思わない——によって突然の抑止を受けたにもかかわらず、結局のところ、わたしがイーストンの鉄の檻のなかでそうなるだろうと思ったように、悲惨な結末に至ることはなかった。その地点からの展望は、不安を抱いて外を望む人間の精神の視野に影を投げかけるどんな展望にもほぼ匹敵するほど暗澹としているように思えたのだ。「終わりよければすべてよし」。わたしの親愛なる同士であるヘンリーとジョン・ハリスは、いまでもウィリアム・フリーランド氏のところにいる。チャールズ・ロバーツとヘンリー・ベイリーは自らの家で安全に暮らしている。したがって、わたしにはこの点で後

(25)

* 本稿はJSPS科研費JP21K00384による研究成果の一部である。

1 シェイクスピアの一六〇二年の戯曲のタイトルより。

悔すべきことはなにもない。彼らの主人は寛大にも彼らを許したのであるが、その理由はおそらく、牢獄への送還の直前に、フリーランド夫人がわたしに向かって血気盛んにまくし立てた短い演説に示唆されている点による——すなわち、彼らはわたしによつて、逃亡するという邪悪な計画に引き込まれたのであり、もしわたしがいなければ、これほど衝撃的なことは絶対に夢にも思わなかったはずである！我が友人たちにも後悔すべきことはなにもなかった。というのも、起こってしまったことのために、彼らはより厳しく監視されたとはいえ、以前よりも間違いなく親切に扱われるようになり、もしこれ以降、それに値するようなふるまいをしていれば、いつか合法的に解放してもらえろという新たな確約を得たからである。わたしが知る限り、彼らのだれひとりに対しても殴打が加えられることはなかった。善良で疑うことを知らぬ人物である主人ウィリアム・フリーランドについて言えば、彼はわたしたちが逃亡を企図していたとはまったく信じていなかった。使用人たちに自分のもとを去る理由などひとつも与えていない——と彼は考えていた——ので、彼らがそれほどに嘆かましい計画を抱くというのは、彼にはありうることは思えなかったのだ。しかしこれは、この問題について「ピリーさま」——温厚な語り口だが狡猾で意思の固いウィリアム・ハミルトン氏をわたしたちはこう呼んでいた——がとっている見方ではなかった。彼はそうした犯罪が目論まれていたことを疑っておらず、わたしをその煽動者だとみなしていたので、この近隣からわたしを遠ざけるか、さもなければ自分でわたしを撃ち殺してやると主人トマスにずばり述べたのだ。彼は、「フレデリック」ほど危険な者が自

分の奴隷たちにちよっかいを出すことを許そうとはしなかった。ウィリアム・ハミルトンはその脅しを安全に無視できるような人物ではなかった。もしこの発せられた戒めが正しく受け取られなければ、彼が言ったとおりのことをしたのであるうことをわたしは疑わない。彼は、わたしたちが犯そうとしていたような横暴な窃盗——わたしたちが自分の肉体と魂を盗むというわけだ！——の代価がいかにほどになるのかを考えて、激怒していた。最初の数歩が実行できれば、この計画が実現する可能性も驚くほど明白であった。その上、このこと、すなわち湾を利用するというのは新しい、発想であった。それまで逃亡する奴隷たちは森に向かったのであり、高貴なるチェサピーク湾の水域を奴隷制から自由への本道とすることによつて、そうした水域を汚し濫用するなどということは決して夢にも思わなかったのだ。以前は奴隷所有者たちによつて防護の壁だとみなされてきたものが、今度は奴隷制にとつての破滅の大道となった。しかし、主人ピリーは、彼が認識しているほど正確にフリーランド氏に事態を認識させることはできず、彼自身と同じくらい主人トマスを興奮させることもできなかった。後者は——これは彼の名誉のために言っておかなくてはならない——このやりとりの彼の領分において多大な慈悲的感情を示し、わたしや他の者たちに対する彼の以前の扱いにおいて厳格で残忍で不当であった多くのことを償った。彼の寛大さは非常にまれで予想外であった。わたしが牢獄に入れられているあいだ、主人トマスが非常に不幸せであったと「いとこのトム」²が

2 ダグラスの母親ハリエットの二歳年上の姉ミリーの息子トム・ベイリー（一八一四年〜）のこと。

わたしに教えてくれた。主人トマスがわたしを解放するためにやってくる前夜には、ほぼ一晚中床を歩き回っていたいへんな苦悶を示していたこと、奴隸商人たちから非常に魅力的な申し出が彼に対してなされたが、お金ではわたしを遠南部へと売り飛ばすような気持ちにさせることはできないと言つて、申し出をすべて断つたことを教えてくれたのだ。こうしたことすべては容易に信じてることができる。というのも、いかなることであろうと、わたしを手放すのを彼はかなり嫌がつているようにみえたからである。彼がこれに同意したのは、近隣で私に対する非常に強い偏見があったからというだけであつて、もしわたしがそこにとどまればわたしの安全が懸念されると彼はわたしに話した。

こうして、田畑で厳しい生活に耐え、ありとあらゆる苦難を経験しつつ田舎で過ごした三年間のうちに、わたしは再びボルチモアへ、自由州を別としては、すべての場所のなかでわたしが最も生きることを望む場所へと戻ることを許された。田舎で過ごした三年間はわたしのうちに、そして主人ヒューの世帯内にくらかの違いをもたらしていた。「ちっちゃなトミー」はもはや小さなトミーではなく、わたしはわずか三年前に東岸に赴いた瘦身の若者ではなかつた。わたしと主人トミーとのあいだの愛情関係は壊れてしまつていた。彼はもはや守つてもらうためにわたしに頼ることはなく、自分自身を他のよりふさわしい交友関係をもつ一人前の男であると感じていた。子供時代には彼がわたしを自分よりも劣つていてと考えることはほとんどなかつた——実のところ、彼と一緒に遊ぶ少年たちと同等だと考えていた。しかし、彼の友人が彼の奴隷にならなくてはならないときが訪れていた。そのた

めわたしたちは冷淡になり、袂を分かつた。わたしたちがかつてはお互いに愛し合つていたのに、いまや違った道を進まなくてはならないのは、わたしにとつて悲しいことであつた。彼には千もの道が開かれていた。教育によって彼は世界中の貴重なものごとのすべてを知つており、そこに至る門は自由によって開かれていた。だが、七年間彼の世話をし、「ああ！フレディと一緒にいれば、トミーはいつも安全ね」と彼の母親に言わせるほどに、兄貴のような心遣いをもって彼を見守り、路上で彼のために喧嘩をし、彼を危害からかばつてきたわたしは、ひとつの境遇に閉じ込められなくてはならなかつた。彼は成長し、一人前の男になることができた。わたしは成長できるが、一人前の男になることはできず、生涯ずっと半人前——単なる未熟者——にとどまり続けなくてはならなかつた。トマス・オールド・ジュニアは帆船ツイード号上の職を得て海へと出航した。彼がどうなつたのかはわたしは知らない。彼の幸福と繁栄をわたしが望んでいるのは確かである。彼以上にわたしが心から愛情を抱いた人物はほとんどいなかったのであり、この世でわたしが会つて嬉しいと思うであろう人物もほとんどいない。

わたしが生活のためにボルチモアに赴いてまもなく、主人ヒューがわたしを、フェルズ・ポイントの大造船業者であるウィリアム・ガーディナー氏に雇い入れてもらうことに成功した。わたしはそこでコーキングを学ぶように配属された。この仕事につ

3 本作執筆の時点では、トマス・オールド・ジュニアが一八四八年に二十四歳の若さで海上事故のため亡くなつていたことをダグラスは知らなかつた。

いては、ヒュー・オールド氏の造船所で彼が棟梁だったときからすでに多少は知っていた。しかし、ガーディナーの造船所は、この目的を達成するのに非常に不都合な場所であることが判明した。この当時、ガーディナー氏は公然とメキシコ政府のために二隻の大型軍艦の建造を請け負っていた。これらの船はその年の七月に進水する予定になっており、もしそれができない場合は、G氏は相当額のお金を損失することになっていた。そのため、わたしが造船所に入ったときには、すべてが大急ぎで追い立てるような状況であった。造船所には百名ほどの人員がいて、そのうち七十から八十名ほどが常勤の船大工——特権的な人夫——であった。ここでの状況について、わたしは数年前に以下のように書いていた——そしていまでもその描写を変更する理由はない。

なにかを学ぶ時間などなかった。だれもが自分でやり方がわかっていることをしなくてはならなかった。造船所に入るさいにガーディナー氏からわたしに与えられた命令は、船大工たちから命じられたことはどんなことでもやれというものであった。これはわたしを、七十五名ほどの人夫の言いなりにさせるものであった。わたしは彼ら全員を主人と見なさなくてはならなかった。彼らの言葉がわたしの法だとされたのだ。わたしが置かれた状況は極めて困難なものであった。ときにわたしは十二組の両手を必要とした。一分のあいだに十二の方向から呼びかけられた。三つか四つの声が同時にわたしの耳に届くのであった。それはこんな具合であった——「フレッド、こっちに來てこの木材を傾けるのを手伝ってくれ。」——「フレッド、こ

の木材を向こうに運んでくれ。」——「フレッド、そののころをこっちに持ってきてくれ。」——「フレッド、きれいな水を桶一杯汲みに行ってくれ。」——「フレッド、この木材の端を切り落とすを手伝いに来てくれ。」——「フレッド、早く行って金てこを取ってこい。」——「フレッド、この引綱の端を押さえていてくれ。」——「フレッド、鍛冶屋に行つて、新しい穴あけ器を取ってこい。」——「おい、フレッド！走つて常温たがねを持つてくるんだ。」——「なあ、フレッド、手伝つてくれ、あそこの蒸し器の下に大急ぎで火を立ててくれ。」——「おい、黒んぼ！來てこの砥石を回すんだ。」——「こいや、こいや！動け、動け！この木材を滑車で前に動かすんだ。」——「おい、黒んぼ、こんちくしょうめ、少しばかりピッチを温めてくれや。」——「おい！おい！おい！おい！」（同時に三つの声。）「こっちにこい！——あっちに行け！——そこにそのままいろ！こんちくしょうめ、もし動いたら、脳ミソをぶちまけてやるぞ！」⁴

親愛なる読者よ、わたしがボルチモアにいた最初の八ヶ月にわたしが学んだ学校の様子は、ざっとこのようなものであった。八ヶ月が終わると、主人トマスはわたしがガーディナー氏のところに留まるのをこれ以上許してくれなかった。彼がわたしを引き下げるに至った事情とは、造船所の白人の見習いたちがわたしに対して加えた容赦ない暴力であった。この争いは生きるか死ぬかというほどのもので、わたしがそこから逃れたとき、ひどく衝撃

4 ダグラスの一八四五年の第一自伝の第九章からの自己引用。

的なままでずたずたの状態であった。わたしは幾多の場所に切り傷と青あざを負い、左目は眼窩からほとんど飛び出すばかりであった。わたしに対してこの野蛮な暴力がふるわれるに至った諸事實は、奴隷制度の転覆において重要な要素となるはずの奴隷制の一面を例証するのであり、したがって、そうした事実をいくらか詳細に述べても構わないであろう。その一面面とはこれである、奴隷制と南部の白人職工と労働者の利害との軋轢のことである。田舎ではこの軋轢はそれほど明らかでないが、ボルチモア、リッチモンド、ニューオーリンズ、モービル等々のような都市では、極めてはっきりと見てとれる。奴隷所有者たちは、彼ら特有の狡猾さをもって、貧しい白人労働者の黒人に対する反感を煽ることで、この白人を黒人奴隷自身とほぼ同等なまで奴隷とすることに成功している。白人奴隷と黒人奴隷の違いはこのようなものである。後者はひとりの奴隷所有者に属するのに対し、前者はすべて、の奴隷所有者たちに、集団的に属する。黒人奴隷が奴隷所有者から直接的に、無造作に受け取ってきたものを、白人奴隷は奴隷所有者から間接的に受け取ってきたのだ。両者とも略奪を受けており、それは同じ略奪者による。奴隷は、その最低限の肉体的な必要性のために要するもの以上の収入のすべてを主人に奪われている。そして白人は、賃金なしで働く労働者の集団との競争に投げ込まれているために、奴隷制によって、彼の労働の正当な成果を奪われている。この競争、およびその有害な影響は、いつの日か、奴隷州で奴隷を所有していない白人たちを奴隷制反対へと組織し、彼らをこの大きな悪に対する最も効果的な労働者にさせるであろう。現在のところ、奴隷所有者たちは、奴隷に対する彼ら

の人間としての、——奴隷としてのではなく——偏見を持続させることにより、彼らをこの競争に対して盲目にさせている。奴隷所有者たちは、解放が白人労働者を黒人と同等にさせる傾向があるとしてしばしば糾弾することで彼らの自尊心に訴えかけ、そしてこの手段により、貧乏白人の心を、彼らは富裕な奴隷主からすれば奴隷とほぼ同然にすぎないとすでにみなされているという真の事実からそらすのに成功している。奴隷制こそが、白人労働者が奴隷の貧窮と墮落の水準にまで転落するのを防ぐことのできる唯一の力だという印象が巧妙に作り上げられているのだ。奴隷と貧乏白人のあいだのこうした反目を深遠で広範にするために、後者は妨げられることなく前者を虐待し鞭打つことを許されている。だが——示唆したように——こうした状況が広まっているのは主に、田舎においてである。ボルチモアという都市においては、奴隷を職工へと教育することは、最終的には、貧乏白人の仕事を完全に不要にする力を奴隷主たちに与えるかもしれないという噂が囁かれることもまれではない。しかし、奴隷所有者たちの気分を損ねることへのいつもながらの恐れゆえに、ガーディナー氏の造船所のこうした貧しい白人職工たちは——この懸念される悪に対して自然で誠実な矯正手段を用い、そこで奴隷たちと並んで働くことをすぐさま拒絶するかわりに——自由黒人の職工たちがアメリカの自由民によって食べられるべきパンを食べていると述べ、自分たちはやつらと一緒に働かないと断言して、黒人の職工たちに卑怯な攻撃を仕掛けたのだ。その際の感情は、本当は、とにかくにも自分たちの労働が黒人の労働と競争させられることに対してであった。しかし、奴隷所有者たちの利益を直接攻撃するの

は行き過ぎなので、そのため——こうして自らの奴隷根性と臆病さを証明しているのであるが——貧しい自由黒人に打撃を与え、自由黒人が比較的元気な時期にその主人に仕えてきた技能をもって、人生の晩年に自分自身に仕えることを妨げようとしたのだ。もし彼らが自由黒人を造船所から追い出すことに成功していたとしたら、黒人奴隷を追い出すことも決意していたであろう。この時期（一八三六年）、ボルチモアではすべての黒人に対する非常に強い敵意が満ちていて、彼ら——自由黒人も奴隷も——はあらゆる種類の侮辱と虐待を受けていた。

わたしがそこに行く直前までは、ガーデイナー氏、ダンカン氏、ウォルター・プライス氏、ロップ氏の造船所で白人と黒人の船大工は並んで働いていた。だれもそうすることを不適切だと感じているようにはみえなかった。外見上は、労働者は全員十分に満足していた。黒人労働者のなかには一流の職工もおり、彼らは最上級の技能を要する仕事を任されていた。しかし突如として、白人の船大工たちが仕事を拒絶し、自分たちは自由黒人と同じ場所ではもう働かないと断言したのだ。彼らは、メキシコのための軍艦を七月に進水できるようにしなくてはならないというガーデイナー氏に課せられた重い契約と、この時期における他の労働者の確保の困難さに乗じて、もしガーデイナー氏が自由黒人の職工たちを解雇しないのならば、自分たちは彼のためにこれ以上腕を振るわないと宣言したのだ。

5 レヴィン・H・ダンキン(Dunkin)、ウォルター・プライス、ジョン・A・ロップはいずれもフェルズ・ポイントの造船業者。

さて、この動きは形式上、わたしを含んではいなかったが、事實上、わたしにも波及した。それが呼び起こした気運は、黒人全般に対する悪意と敵意のそれであり、わたしは他の者たちとともに苦しみ、それはひどい苦しみであった。まもなく、わたしの同僚の見習いたちは、わたしと一緒に働くことを屈辱的だと感じ始めるようになった。彼らはお高くとまった態度をとり、「黒んぼたち」のことをさげすんで悪しざまに話すようになった。いわく、「やつらがこの国をのっとる」であり、「やつらは殺さなくちゃならねえ」のだと。わたしが奴隷だと知っていながら、わたしがそこにいることについてガーデイナー氏と争おうとはしない臆病な職工たちにそのかされて、こうした若者たちはわたしごとどまれないように精いっぱいのことをした。彼らがわたしになにかを命じるときには、ほぼ決まってそれに罵倒がともなっていた。それで、卑劣さを含むあらゆる点において最大の人物であったエドワード・ノースがわたしを殴ろうとしたので、わたしは彼を受け止め、船渠に投げ飛ばした。彼らのうちのだれかに殴られたときにはいつでも、結果など考慮せずに殴り返していた。彼らのうちのだれであろうと、それがひとりだけであれば、わたしは対処できたのであり、彼らが徒党を組むのを妨げることができるあいだは、かなりうまくやっていたのだ。ガーデイナー氏の造船所でのわたしの仕事に終止符を打った争いでは、わたしは彼らのうちの四名——ネッド・ノース、ネッド・ヘイズ、ビル・スチュアート、そしてトム・ハンフリーズ——から同時に襲撃された。彼らのうち二名はわたしと同じくらい体の大きさで、彼らは白昼堂々とほとんどわたしを殺すところであった。襲撃は突然に、

そして同時に行われた。ひとりは煉瓦を手前方からやってきて、両側にそれぞれひとりずつ、後ろに一名で、彼らはわたしを取り囲んで迫ってきた。わたしは全面から殴られ、前からの殴打に対処しているときに、後ろから重いてこ棒による一撃を受けた。この一撃でわたしは完全に気を失い、どしんと地面に、木材のあいだへ倒れた。わたしが倒れたのに乗じて、彼らはわたしに襲いかかり、拳で殴りつけ始めた。わたしは意識が戻ってから、力を回復するためにしばらくは彼らに殴られるままに任せていた。この時点まで彼らからわたしが受けたダメージはほとんどなく、ついにわたしはこの遊びにもうんざりして、突然体を起こし、彼らの重さにもかかわらず四つん這いになった。まさにそのとき、彼らのひとり（だれなのかはわからない）ブーツでわたしの左目を蹴ったため、しばらくのあいだ、わたしの眼球は破裂してしまったかのようであった。わたしの片目が完全に閉じ、顔中血だらけになっていて、彼らから受けた強烈な殴打によってわたしがふらふらになっているのを見ると、彼らはわたしから離れていった。わたしは十分な力を回復するとすぐに、てこ棒を拾い上げ、実に気狂いじみているのだが、彼らを追おうとした。だが、船大工たちが割って入ってきて、わたしが逆上して追跡するのを止めた。これほど多くの者たちに立ち向かうのは不可能であった。

親愛なる読者よ、あなたはこの証言をほとんど信じられないだろうが、それは本当であり、だからわたしはそれを書き記そう。五十人を下らない白人たちがそばにいて、この容赦ない恥知らずの蛮行がなされるのを見ていたが、彼ら全員うちのひとりとし

て一言でも同情の言葉を投げかける者はいなかったのだ。ひとりに対して四名が襲いかかり、その一名の顔はかなりひどくずたばろに殴られていたが、だれひとりとして「もう十分だ」と言う者はいなかったのだ。それどころか、「やつを殺せ——やつを殺せ——あの忌々しい黒んぼを殺せ！脳ミソをぶちまけてやれ——やつは白人を殴ったんだ」と叫んでいる者もいた。わたしがこの無慈悲なかけ声に言及するのは、一八三六年のガーディナーの造船所での、そして実のところ、ボルチモア全体の労働者の性質と時代精神を示すためである。この時期を振り返ってみると、あの造船所に行き渡っていた雰囲気は非常に凶悪であったので、わたしがあの場合ですぎさま殺されなかったことにほとんど驚きを感じる。あそこにいたときに、わたしは二度にわたって命を失いかけた。わたしはヘイズと一緒に船倉で内竜骨にねじ釘を打ち込んでいた。その作業のなかで、一本のねじ釘が折れ曲がってしまった。ヘイズはわたしを罵って、わたしの打ち方が悪くてねじ釘が折れ曲がったと言った。わたしはそれを否定して、彼のせいだと言った。ヘイズは激怒して手斧をつかんでわたしに襲いかかってきた。わたしが大木槌で応戦して彼の一撃をかわしていなければ、そのとき命を失っていたに違いない。老トム・ランマンの息子（前者の二件の殺人については別の箇所で告発した）はそのあさましい父親の気質そのままにわたしを襲撃したが、大槌によるその一撃はわたしに当たらなかった。ノース、スチュアート、ヘイズ、ハンフリーズの一団による襲撃のうち、船大工たちが見習いたちと同様にわたしに対して敵意を抱いていること、そしておそらく後者は前者によってけしかけられていたことが判明し、わた

しが生きのびる可能性があるとしたら逃げるしかないことがわかった。わたしはそれ以上殴られるまゝに逃げ出すことに成功した。白人を殴ることは、ガーディナーの造船所のリンチの掟によれば死であった。メリーランドの他のどの場所においても、その当時、黒人に対してはそれ以外の掟はあまりなかったのだ。ボルチモア全般の風潮は凶悪であった。

わたしは造船所から抜け出すと、家にまっすぐ向かい、主人ヒュー・オールドに暴行の話を語った。彼の名誉となるように言っておけば、彼のふるまいは——信心深い人物ではないとはいえ——、わたしが「信徒兄弟エドワード・ユヴェイ」のもとから、いくらか似たようなありさまで彼の兄のトマスのところに行つた際のトマスのふるまいよりも、あらゆる点で慈悲深かつた。彼は、無法な暴行に至つたいきさつについてわたしが語るのに注意深く耳を傾け、なされたことに対してひどく憤つてることがわかる様子をおおいに示した。ヒューは乱暴ではあつたが人情深い心の持ち主であり、このときには彼の最も優れた性質が表れていた。かつてほとんど親切すぎるほどであつた女主人ソフィアの心は、再びわたしに対して慈愛で解きほぐされた。わたしの腫れた片目と傷だらけで血まみれの顔を見ると、この親愛なる女性は動揺し涙を流した。彼女は親切にもわたしのそばに椅子を寄せ、優しい慰めの言葉をかけながら、水を手につけてわたしの顔から血を拭ってくれた。どんな母親の手も、彼女の手より柔らかくはなりえなかつたであろう。彼女はわたしの頭に包帯を巻き、負傷した目を新鮮な牛肉の赤身の一切れで覆つてくれた。我が女主人がもともと持ちあわせていた優しさをもう一度發揮する機会を提供

してくれたことは、凶悪な暴行とわたしの苦しみをほとんど埋め合わせるものであつた。彼女の情愛に満ちた心は時間と状況によつてかなり硬化していたとはいえ、まだ死んでいなかったのだ。主人ヒューの方では、すでに述べたように、彼はこのことについて憤つており、あの地域ではよく使われるような言葉で自分の憤慨を表現した。彼は造船所会社全体の経営陣に悪態をつき、この暴行の賠償をさせると宣言した。彼の怒りは本当に強く健全であつたが、残念なことに、それは人間としてのわたしに対して暴行が加えられたという意識に基づくというよりも、わたしの身体に存する彼の財産権が尊重されなかつたという考えに基づいていた。わたしがこれだけのことを推量したのは、彼自身、そうすることが自分にとつて都合がよいときには、殴つて痛めつけることをやりうるという事実からである。主人ヒューは、彼が述べたように、賠償を得る心算だったので、わたしが怪我から少し回復すると、わたしを襲撃した者たちを逮捕してもらうために、フェルズ・ポイントのボンド通りのワトソン氏のところをわたしを連れていった。彼はわたしが彼に述べたように暴行について判事に述べ、この無法なならず者たちの逮捕状をすぐに発行してもらえらるうと期待しているようにみえた。

ワトソン氏はこれをすべて聞くと、逮捕状を書くかわりにこう尋ねた。

6 ウイリアム・H・ワトソン（生年不詳、一八四六年）は当時のフェルズ・ポイント界限で名が通つていた弁護士・治安判事。のちに米墨戦争が始まると従軍し、一八四六年七月のカリフォルニアのモンテレーでの戦いで戦死した。

「オールドさん、だれがあなたの話すその暴行事件を目撃しましたか？」

「造船所の労働者全員の面前でやられたんです。」

「あの」とワトソンは言った、「申し訳ないですが、白人の証人の陳述による以外では、この件で措置を講じることはできません。」

「でも、ここにその被害者がいるんですよ。彼の頭と顔を見てください」と興奮した主人ヒューが言った。「なにがなされたのか、これが示しています。」

だが、ワトソンは、この出来事の白人の証人が歩み出て、なにが起きたか証言しないかぎり、どんなことをする権限もないと言いつ張った。わたしの証言に基づき、白人に対して逮捕状を発行することはできず、もし、千人の黒人たちの面前でわたしが殺されたとしても、彼らの証言すべてをあわせようと、ひとりの殺人者を逮捕するには不十分だろうとのことだった。主人ヒューも今回ばかりは、こうした現状はあまりに遺憾だと言わざるをえず、うんざりして判事の事務所を立ち去った。

もちろん、わたしの襲撃者たちにとって不利な証言を白人にさせることは不可能であった。船大工たちはなにがなされたのか見ていたが、加害者は彼らの悪意の手先にすぎず、ただ船大工たちが認めたことを行っただけであった。彼らは一致して、「黒んぼを殺せ！黒んぼを殺せ！」と叫んでいたのだ。わたしに同情していたかもしれない人たちでさえ、仮にそんな人があのなかにいたとしても、歩み出て自身の証言を進んで差し出すだけの道徳的な

勇気を欠いていた。黒人に対して少しでも同情や正義を表明しようものなら奴隷制廃止論者と非難され、廃止論者という名称はそれを帯びる者にひどい不都合をもたらした。「忌々しい廃止論者」と「黒んぼを殺せ」がこの時期の口汚いならず者たちのスローガンであった。なにがなされなかったのであり、もしわたしがこの騒ぎで殺されていたとしても、なされることはおそらくなにもなかったであろう。ボルチモアというキリスト教徒の都市の法と道徳は、この都市の肌黒い住民たちにはなんの保護も与えてくれなかったのだ。

主人ヒューは、このひどい不正への賠償が得られないことがわかると、ガーディーナー氏の仕事からわたしを引き上げて、自分自身の家庭に収容した。オールド夫人がわたしの面倒を見て、傷の手当てをしてくれたので、傷が治ってわたしは再び仕事に出られる状態になった。

わたしが東岸にいた時期に、主人ヒューは失敗し、事業が立ち行かなくなっていた。彼はシテイ・ブロックの自分自身の造船所での造船業をやめ、当時はウォルター・プライス氏の現場監督として働いていた⁷。このときに彼がわたしのためにできた最善のことは、わたしをプライス氏の造船所で働かせて、わたしがガーディーナー氏のところまで学び始めていた技能を学び終えるように、そこで利便を図ることであった。ここでわたしはコーキングの道具の使用にすぐさま熟達し、一年もすると、ボルチモアで熟練

⁷ シテイ・ブロックは、一八二〇年代にフェルズ・ポイントとボルチモア中心部のあいだにあった湿地を浚渫することでできた地区。これによってフェルズ・ポイントの埠頭地域が拡大された。

コーキング工に支払われる最高額の賃金をもたらせるようになった。読者は、わたしがこのときには主人にとってある程度の金銭的価値をもっていたことがわかるであろう。繁忙期には、わたしは一週間で六〜七ドルを持ち帰っていた。賃金は一日で一ドル半だったので、ときには、一週間で九ドルもの額を彼にもたらすこともあった。

コーキングを学んでは、わたしは自分で仕事先を探し、自分で契約を結び、自分で報酬を回収していた。わたしが当事者となっていた取引のいかなる部分においても、主人ヒューに面倒をかけることはなかった。

したがって、ここには東岸の奴隷にとつて比較的よい日々があった。わたしはガーディナー氏の造船所の見習いたちからうっとおしい襲撃をいまや逃れていた。農園生活の危険から逃れ、ボルチモアから離されて以降は完全に停止していた、わずかな教育の蓄積を増やすのに都合な状況にもう一度なったのだ。東岸では、わたしは他の奴隷たちと一緒に教師であるだけだったが、いまではわたしを教育してくれる黒人たちがいた。若いコーキング工の多くは読んで書いて暗号文を作ることができた。彼らのうちには精神の向上について高尚な考えを抱く者もいて、フェルズ・ポイントの自由身分の黒人たちは彼らが「東ボルチモア精神向上協会」と呼ぶものを組織していた。この協会には自由身分の者だけが所属すべきだと意図されていたにもかかわらず、わたしは入会を許され、そこでの議論で重要な役割を何度か任された。これらの若者たちの協会にわたしは多くを負っている。

読者は、わたしの境遇が改善されたことで、どのような事態が

ここで生じたのかを予測できるほど十分に、よい扱いが奴隷に及ぼす悪影響についてすでにわかっている。ほどなくしてわたしは、奴隷制に対する不穏な感情の兆候を示すようになり、最短の経路でこの状況から抜け出す手段を探し求めるようになった。わたしは自由民のなかに生きていて、天性においても技能においても、あらゆる点で彼らと同等であった。なぜわたしが奴隷でなく、てはならないのか？わたしがだれかの奴隷であるべき理由など、心になかったのだ。

そのうえ、わたしはいまでは——すでに述べたとおり——一日あたり一ドル半を得ていた。自分でその額の契約を結び、その額の仕事をし、その額を稼いで、その回収をしていた。それはわたしに対して支払われ、正当にわたしのものであった。にもかかわらず、土曜の夜が巡ってくるたびごとに、このお金——その一セントに至るまで、わたし自身で苦勞して得た稼ぎ——を渡すように主人ヒューから要求され、奪い去られたのだ。それは彼が稼いだものではなく、そこに彼の助力はなかった。ならば、どうして彼がそれを我がものとするのであろうか？わたしは彼になんの借りもなかった。彼がわたしを学校に行かせてくれたことはなかったし、彼からもらったのは食料と衣服だけであった。これらについては、最初からわたしの仕事とその代価とされていたのだ。わたしの稼ぎを奪う権利とは盗人の権利であった。彼にはわたしの労働の成果を彼に渡すようにわたしに強いる力があり、目下の事例においては、この力こそが彼の唯一の権利であった。わたしは次第にこのような状況に不満を覚えるようになっていた。そして、そのような状況につれ、わたしの人生のこの時期について読

んだ者であればだれしも——奴隷所有者も非奴隷所有者も——有していることを意識する、あの同じ人間本性を、わたし自身が証拠立てるだけであった。

満足した奴隷を作るためには、思慮分別のない奴隷を作らなくしてはならない。彼の道徳的精神的視野を暗くし、できるかぎり彼の理性の力を抹消することが必要である。彼が奴隷制の矛盾を見つけれないようになくしてはならない。奴隷の稼ぎを奪う者は、彼にはそうする完全なる権利があると奴隷に思わせることができなくてはならない。それは単なる力によるのであってはならず、奴隷は彼の主人の意志よりも（高位の法）を知ってはならない。両者の関係性全体が、その必然性だけでなく、その絶対的正当性を奴隷の精神に対して立証しなくてはならない。一滴でもそのあいだを落ちることができるような隙間があれば、奴隷の鎖は間違いなく腐食されて抜け落ちてしまうであろう。

第二十一章 奴隷制からの逃亡

わたしの「奴隷としての生活」の最後の出来事、逃亡のすべての詳細を述べない理由、奴隷所有者たちの狡猾さと悪意、奴隷の逃亡の幫助の疑いは確固たる証拠とほぼ同等に危険、脱出者の逃亡の詳細を公表する際に表れる見識の欠如、公表された説明は奴隷ではなく主人に届く、奴隷所有者たちは刺激されてますます警戒する、作者の状況、不満、主人ヒューがわたしの稼ぎを受け取る際の様子に示される猜疑、彼のときおりの太っ腹さ、逃亡経路にある困難、すべての道は見張られている、資金を手に入れる計画、作者が自分の時間を買う許可を得る、一閃の希望、許可なく野外集会に参加する、それへの主人ヒューの怒り、その結果、それによって逃亡計画が加速する、出発の日が決まる、疑念と恐れに苦しむ、友人たちとの別れへのつらい思い、企てが実行される、その成功

すでにわたしの「自由民としての生活」に割り当てられた限界にまで踏み込んでしまっているが、親切な読者にわたしの「奴隷としての生活」の最後の出来事をここではお伝えしよう。だが、この話を進めるまえに、わたしが奴隷制からの逃亡に関連する諸事実の一部を書き記すのを差し控える意向であることを事前に率直に述べておくのがおそらく妥当であろう。このように差し控えるにはいくつか理由があり、読者がそれは完全に正当であると思ってくれるだろうとわたしは信じている。奴隷の逃亡に関する全事実をすべて余すことなく述べることは、知ってか知らずか彼

を手助けしたかもしれないだれかを巻き込み、困惑させる可能性があることは容易に想像できるであろう。そして、困惑や不都合の危険性があつても、わたしの味方となつてくれた男女をわたしが巻き添えにするのを望むことのできる者は皆無なのだ。

奴隷所有者の嗅覚は鋭く、彼の悪意は、ガラガラヘビの牙のようにその毒を長期間にわたつて保持する。わたしが逃亡してからもう十七年近くになるが、これに関する事情を扱う際には慎重でいるのがよい。もしわたしが、採られた手段についてはほめかし程度でも概略を示したりすれば、奴隷所有者のなかでも狡猾で悪意のある者たちが、その特徴的な能力によつて、わたしが進んだ経路をひよつとすると嗅ぎつけ、だれかに疑いをかけるかもしれない。それは奴隷州においては、確固たる証拠とほぼ同程度にゆしきことである。奴隷州では、黒人は悪を避けるだけでなく、悪に見え、こと自体を避けなくてはならない。さもなければ、犯罪者として糾弾されてしまうのだ。奴隷所有の共同体は、奴隷制度を害する罪を探り出すことをひときわ好んでおり、そこでの正義は、他のどんな利害や制度に対する以上に、この体制に特有の諸権利に対する関心において、より敏感である。仮にわたしがさほどはつきり書かなくても、出来事と状況を連続的に結びつけることにより、逃亡の手段が判明してしまうかもしれない。そうすると、わたしが後に残してきた、自由を求めている奴隷制の所産たる人々は、ひよつとすると今後、同じ手段がもはや使えなくなつてしまうかもしれない。反奴隷制の立場の者であれば、そのような結果を促すことをわたしが望むことはできず、奴隷を所有する読者には、そのような情報が提供されるのを期待するど

んな権利もないのだ。

したがつて、もしわたしが好き勝手に、多くの人たちの心に存在するとわかっている、わたしの逃亡の仕方に関する好奇心を満たしても構わないのであれば、それでわたしは喜びを得て、ひよつとするとわたしの話の興味は著しく増すことになるだろうが、わたしは自分自身に対してそのような喜びを差し控えなくてはならず、好奇心を抱く人たちには、そうした諸事実の開陳がもたらすであろう満足を差し控えなくてはならない。わたしは、説明によつて自分自身の無罪を証明し、そうすることで、苦しんでいる兄弟が奴隷制の鎖と足枷から逃れる手段となるかもしれないわずかな経路を閉ざしてしまふ危険を冒すよりも、邪悪な心の持ち主たちが示唆するであろう最大の非難のもとで苦しもうと思つた。

奴隷がそれによつて奴隷制から逃亡したと知られている新たな手段が考案されるたびに、それを公表するという慣例には、それを妥当としうような見識も必然性もない。ヘンリー・ボックス・ブラウンとその友人たちが、彼の逃亡のやり方に奴隷所有者の注意を引きつけていなければ、一年あたり一千人のボックス・ブラウンが出てきていたかもしれない。ウイリアムとエレン・クラフトによつて採用された非常に独創的な計画は、この地のあらゆる奴隷所有者が知り及んだため、最初の使用で使えなくなつ

8 (ヘンリー・「ボックス」・ブラウン(一八一五年〜没年不詳)はヴァージニア州に奴隷として生まれ、一八四九年に貨物用の木箱に身を潜めてフィラデルフィアに逃亡した。同年にその経緯を述べた逃亡奴隷物語が出版されただけでなく、箱から出てくる様子を描写した挿絵がさまざまな印刷物に掲載されるなど、ブラウンは一躍有名人となつた。

てしまった。蒸気船のガードにぶら下がって——もうひとりのヨナのごとく——三日三晩、海の波に洗われた海洋奴隷は、その経緯が広く報じられたために、南部の港を出港するすべての蒸気船のガードに密偵を置くことになってしまった¹⁰。

わたしたちの西部の友人たちのうちの一部分が、彼らが「地下鉄道」と呼ぶところのものを運営してきたやり方に、わたしはまったく賛同してこなかった。それはむしろ、彼らが公に宣言することとで、きわめて顕著に「地上鉄道」にされてきたと思うのだ。その停車駅は、奴隷たちよりも奴隷所有者たちにはるかによく知られている。奴隷の逃亡に手を貸していることを公に明言することで、自分自身で進んで迫害を受けようとしている点において、わたしはこれらの善良な男女をその高貴な勇敢さゆえに称賛する。しかし、そのような明言から生じる利点となると、それは非常に疑わしい性質のものである。それは吸い込めば非常に気分のよい熱狂を燃え立たせるかもしれないが、この熱狂は、彼らたち自身にも、逃亡する奴隷たちにも実質的な利益とはならない。そうした開示は、まだ残されていて逃亡を望んでいる奴隷たちにとって

9 ウィリアム・クラフト(一八二四年〜一九〇〇年)とエレン・クラフト(一八二六年〜一八九一年)はジョージア州に別々の主人の奴隷として生まれ、のちに結婚した。一八四八年に、生まれつき肌の色が白いエレンが白人の農園主、ウィリアムがその付添いの奴隷のふりをする事で北部に脱出することに成功し、二人の脱出劇は当時の新聞で広く報道された。

10 蒸気船のガードは、水かきの外輪を守るために主甲板の両側から延伸している部分。旧約聖書のヨナ書によれば、神の怒りを買ったヨナは海に投げ出され、巨大な魚に呑み込まれて、その腹の中で三日三晩を過ごしたとされる。

疑いようのない害悪だという以上に明白なことではない。そのような話を公表することで、反奴隷制主義者は奴隷にはなく、奴隷所有者に語りかけている。後者を刺激してますます警戒させ、その奴隷を捕らえるためのさらなる便宜を与えているのだ。わたしたちはメーソン・ディクソン線の南側の奴隷たちに対して、北側の者たちに対するのと同様に、なにかを負っているのであり、後者の自由への道のりを助ける義務を果たす際に、前者が奴隷制から逃亡するのを妨げるだろうと思われることはしないように気をつけるべきである。わたしは奴隷制を非常に嫌悪しているので、奴隷によって採用される逃亡手段については、非情な奴隷所有者をどこまでも無知のままにさせておきたい。彼の悪辣な手から、その震える獲物をいつでも奪い去ろうと身構えている無数の見えない敵たちに自分自身が囲まれているのだと、彼が想像するままにさせるべきなのだ。彼が勝利を追い求める際に、暗闇のなかで道を探りするままにさせておこう。彼の犯罪にふさわしいほど深い暗闇によって、彼の進む道からあらゆる光線が締め出されるようにしよう。そして、兄弟たる人間を奴隷制に押しとどめるといふ邪悪な目的をもって彼が一步を踏み出すごとに、自分の温かい脳みそが見えない手によってぶちまけられるという恐ろしい危険を冒していると感じさせるようにしよう。

しかし、これについては十分である。ここから、わたしの逃亡に関連して、それに対してはわたしだけが責任を負っていて、そのためわたし以外には苦しませられる者がいない諸事実を述べたい。

逃亡した年(一八三八年)のわたしの状況は、少なくとも肉體

的人間の必要性に関する限りでは、比較的自由に安楽であった。だが、わたしの困難は当初から肉体的というよりも精神的なものであったということを、読者は念頭に置いてもらいたい。そうして、これまでの章で述べられてきたことのあとでは、読者は、わたしが年齢を重ねて奴隷生活をもっと知るにつれて、それがわたしにとつて魅力を増すことはなかったと了解する準備ができているのである。毎週毎週、わたしの稼ぎのすべてが公然と収奪されるという慣習のために、わたしの目の前には奴隷制の本質と性質が常に突きつけられていた。収奪がまわりくどいやり方でなされていけば、それに甘んじることもできたかもしれないが、それはあまりに公然であつかましかったので耐え難かった。なぜ各週の終わりになると、自分の正当な労働の対価をだれかの懐に納めなければならぬのか、理由がわからなかった。この考えそれ自体がわたしを苛立たせ、主人ヒューのわたしの賃金を受け取り方はもともとの悪行以上にわたしを苛立たせた。彼は慎重に一ドル一ドルお金を数えてそれを広げて置くと、あたかもわたしのポケットだけでなく心も探るかのようにわたしの顔を見据えて、非難がましく「これ、全部か？」と尋ねるのだった——ひよつとすると、わたしが賃金の一部を渡さないで持っているかもしれないと暗に言わんとしているか、あるいはそうでなければ、この要求はおそらく、結局、わたしが「役立たずの使用人」なのだと感じさせるためになされていた。彼はわたしが苦勞して稼いだ賃金を最後の一セントまで搾り取るのだが、ときに——わたしがいつも以上に多い額を家に持ち帰るときには——おそらくはわたしの感謝をかき立てるために、半シリングか一シリングをわたしに分け与

えるのだった。だが、この慣例は逆効果であった——それは全額に對するわたしの権利を認めるものだったのだ。彼が賃金の一部でもわたしに与えたという事実は、わたしがその全額に對して権利を持っていると彼がうすうす思っている証拠であった。わたしはこのようなやり方でなにかを受け取ったあとには、いつも居心地の悪さを感じていた。わたしに数セント与えることでおそらく彼の良心は慰撫され、結局のところ、自分自身がかなり高潔な盗人であると彼に感じさせてしまうかもしれないとわたしは恐れたのだ。

厳格に戒められ油断のない監視下に置かれていたので——わたしが逃亡しようとしているという以前の嫌疑は完全には晴れていなかった——ボルチモアにおいてさえ、奴隷制からの逃亡は非常に困難であった。ボルチモアからフィラデルフィアまでの鉄道は非常に厳戒な統制下に置かれていたので、自由身分の黒人の乗客でさえほぼ排除されていた。彼らは自由身分の証明書を所持しなくてはならず、車両に乗り込むことを許可されるまえに、じろじろ見られて注意深く検分されなくてはならなかった。そのように検分されたときでも、移動は日中だけであった。蒸気船も同様に厳戒統制下にあった。北部に至るすべての大きな通行料取立門には人さらいたちが押し寄せていた。彼らは、逃亡奴隷の広告を求めて新聞に眼を通しては、奴隷狩りの忌まわしい報酬によって生計を立てている輩であった。

わたしの不満は募るばかりで、わたしは逃亡手段を求めて目を配っていた。お金があれば、この問題に案に対処できるはずだったので、自分の時間を買う特権を認めてくれるように頼んでみる

という計画を思いついた。この特権を奴隷に認めるのは、ボルチモアではきわめて普通のことであり、ニューオリンズでも慣例となっている。信頼に値すると考えられた奴隷は、定期的に各週の終わりに一定の額を主人に支払うことよって、好きなように自分の時間を使うことができるのだ。あいにく、わたしはあまり評判がよくなく、信頼に値する奴隷ではまったくなかった。それでもわたしは、主人トマスが春期の在庫品買い出しのために、一八三八年の春にボルチモアにやってくる機会をうかがい、自分の時間を買うという非常に切望された特権を認めてくれるように彼に直接打診した。主人ヒューはこの頼みをためらうことなく却下した。そして、逃亡のためにこのような策略を考え出したとして、わたしをいささか厳しく責めた。「俺が捕まえないような場所には、どこにもお前を行かせないぞ」と彼はわたしに言った。そして、もしわたしが逃亡したら、彼はどんな労力を払ってでもわたしを捕まえるつもりであると覚悟しておけと言った。彼はかなり雄弁に、彼がわたしに対して払った数多くの尽力を述べたて、満足して従順になるようにわたしを諭した。「将来の計画など立てるな」と彼は言った。「もしお前がきちんと大人しくしていれば、俺がお前の面倒を見てやる。」さて、この申し出は親切で思いやりに満ちていたが、わたしをなだめて落ち着かせることはなかった。主人トマスの意図にもかかわらず、そしてまた、わたし自身の意図にもかかわらずと云っていいかもしれないが、わたしは奴隷制の不当性と邪悪さについて考え続け、そしてもっと悪いことに、ほぼそれだけについて考え続けたのだ。

自分の時間を買うという特権について主人トマスに打診してか

らほぼ二ヶ月後に、わたしが同様の打診を主人トマスに行つて断られたことを主人ヒューは知らないだろうと思ひ、彼に同じ特権を打診した。このようなことを頼んでくるわたしの大胆さは最初、彼を仰天させた。彼は驚いてわたしをまじまじと見た。しかし、わたしにはこれを強く求める数多くの十分な理由があったので、彼はそうした理由にしばらく耳を傾けると、断固として拒絶することはなく、考えてみようとうわたしに言った。かくして、一筋の希望の光明がここでもたらされた。いったん自分自身の時間の主人になれば、彼に対する義務の分以外に、毎週一、二ドルを稼ぐことができるとうわたしは確信を感じていた。そのようなやり方で、自分の自由身分を買うのに十分な額を稼いだ奴隷もいた。それは勤勉を促す鋭い拍車であり、ボルチモアの最も進取的な黒人のなかには、そのようなやり方で自分自身を雇いに出している者もいる。主人ヒューは熟慮——きつと熟慮したと思わざるを得ないので——のちに、次のような条件のもとで、この問題となる特権をわたしに許可してくれた。わたしの時間はすべて認められ、仕事のためのすべての交渉を行うことができ、自分自身の仕事を先を見つけてよい。この自由の見返りとして、各週の終わりに彼に三ドルを支払い、自分自身の衣食を賄い、自分自身のコーキング道具を買うことが必要とされる、すなわちその義務を負う。こうした条項のいづれでも履行し損なつた場合は、わたしの特権は終了する。これは困難な契約であった。世間に借りを作ることなく、衣服の摩耗や損傷、道具の紛失や破損、そして食事代を賄うためには少なくとも週に六ドルを稼ぐことが必要であった。コーキングのことをわかっている者であればだれしも、この仕事

がいかに不安定で不定期であるのかを知っている。継ぎ目に濡れた横肌オウカミを詰めても無益なので、コーキングを効果的に行えるのは乾燥した天気ときだけである。しかし、雨だろうと晴れだろうと、仕事があるうとなかろうと、各週の終わりにこの額を差し出さなくてはならなかったのだ。

主人ヒューはしばらくのあいだ、この取り決めに非常に喜んでいようであり、それももつともなことであった。それは断然、彼に有利なものだったからである。それはわたしに関するすべての不安から彼を解放した。彼が得る金銭は確実であった。彼はわたしの自由愛を、わたしがそれまで知っていたどんなものよりもはるかに効率的な鞭と使役人で囲い込んだのだ。そして彼はこの取り決めによって、奴隷所有の害悪なしに、その利益のすべてを得ていたのだが、その一方でわたしは奴隷であることの害悪のすべてを耐え忍びながら、責任ある自由民の心配と不安のすべてを被ったのだ。「だが」とわたしは考えた、「これは価値ある特権だ——自由へのわたしの道のりのさらなる一歩だ」。自由にとまなう不都合のもとでよろめくことを許されるのでさえ相当なことであり、わたしは相応な勤勉さをすべてふり絞って、この新たに獲得した足場にしがみつくことを決心した。わたしは日中だけでなく、夜間も働く心づもりであった。そして、わたしは素晴らしい健康を享受している、目下の経費を支払うだけでなく、各週の終わりに少額を貯めることもできた。五月から八月まで、事態はすべてそのように進展した。その後——わたしの話が進むにつれ明らかになるであろう理由により——わたしがとても大切にしていた自由が、わたしのもとから奪われたのだ。

この（わたしにとって）壊滅的な出来事の前の週に、わたしは土曜日の夜に数人の友人に付き添って、ボルチモアから十二マイルほどのところで開かれる野外集会に行く約束をしていた。この野外集会へ出発するはずであった日の夕方に、わたしが働いていた造船所であることが起こったため、わたしはかなり遅くまでひき止められてしまい、年若い友人たちをがっかりさせるか、毎週の賦課金を主人ヒューに持参するのをおろそかにするかのどちらかを余儀なくされた。わたしはその金額を所持しており、別の日に彼に手渡すことができるとわかっていたので、野外集会に行き、帰ってきたら前の週の分の三ドルを彼に支払うことに決めた。いったん野外集会に参加すると、出発したときに予定していたよりも一日長く滞在しようという気持ちになった。だが、わたしは戻るとすぐに、彼の（わたしの）お金を彼に渡すためにフェル通りの彼の家に直行した。あいにく、致命的な間違いを犯してしまっていた。彼はひどく怒っていた。彼は、お気に入りの奴隷が逃亡したと思われる場合に奴隷所有者が示すと想像されるような懸念と憤慨のあらゆる兆候を示した。「この悪党め！お前にはきつときつい鞭打ちをしてやるぞ。最初にわたしの許可を頼んで得ずに、ずうずうしくも街を出るとはどういうわけだ？」「恐縮ですが」とわたしは言った、「わたしは自分の時間を買っています、その対価としてあなたが求める金額を支払いました。わたしがいつ、あるいはどこに行くべきかについて、あなたに尋ねないといけないというのが契約の一部になっているとは知りませんでした。」

「知らなかっただと、この悪党め！お前は毎土曜の夜にここに

出頭しなければならぬのだぞ。」彼は数秒考え込むと、いくら落ち着きを取り戻したが、明らかにひどく混乱した様子でこう言った、「おい、この下衆野郎め！お前が自分で台無しにしたんだぞ。もう自分の時間を買うのはやめだ。次にお前のことを耳にするとしたら、お前が逃亡したってことだろうからな。すぐに道具と服を持って戻ってくるんだ。どうすればこんなことになるのか、お前に思い知らせてやる。」

こうしてわたしの部分的な自由は終わった。わたしはもう自分の時間を買うことができず、主人の命令にすぐさま従った。わたしが味わったわずかな自由の味は——読者も了解するだろうように、それは純粹なものからは程遠かったが——奴隷制への満足を強めることにはまったくならなかった。主人ヒューからこのように罰せられ、今度はわたしが彼を罰する番であった。「あなたがわたしを奴隷にしようというつもりならば、わたしはすべてのことでああなたの命令を待つつもりだ」とわたしは考えた。そして、以前はやっていたように、月曜日の朝に仕事を探しに出かけるかわりに、仕事で腕を一振りすることなく、まるまる一週間家にとどまった。土曜日の夜が来て、彼はいつもどおりわたしの稼ぎを要求した。もちろんわたしは仕事を一切しておらず、稼ぎもないと彼に述べた。ここでわたしたちは殴り合い寸前であった。彼の怒りはその一週間鬱積していた。というのも、わたしが仕事を見つけようと努力しておらず、すべてのことにおいて、神経をひどく逆撫でするかのように彼の命令を待っているというのを彼は明らかに見てとっていた。わたしのこのふるまいを思い返してみると、なにがわたしに取り憑いたために、わたしに恩恵でも損害

でも与えられるこれほど無制限の力をもった人物を、このようにぞんざいに扱ったのかについてはほとんどわからない。主人ヒューは怒鳴り散らし、「わたしに手をかけろ、」決心を言明した。だが、彼にとつては賢明なことに、そしてわたしにとつては幸運なことに、彼の怒りが用いるのは、軽快なる舌から流れ出てくることうした非常に無害でたわいない飛び道具だけであった。わたしは自暴自棄のなかで、もし主人ヒューがその脅しを実行しようとするなら、力で彼に応戦することを完全に心に決めていた。その必要がなかったことを嬉しく思う。というのも、彼への抵抗は、コヴィイの場合にそうだったように、わたしにとつて幸運なかたちで終わるはずはなかったからである。彼は奴隷が安全に歯向かえるような人物ではなかったのであり、この局面での彼へのわたしの行動には知恵よりも愚かさが見え出たことを腹藏なく認めよう。主人ヒューは、仕事を見つけてくることについて、今後わたしが心配する必要はないと言つて叱責を締めくくった。彼が「こつちでお前の仕事を見つけてやるし、しかも十分な仕事を見つけてやる」とのことだった。この脅しにはいくらか恐ろしいところもあったと白状する。日曜日にこのことをよく考えてみて、彼にわたしの仕事を見つけてる労力を省いてあげることだけでなく、九月三日に奴隷制からの逃亡を試みることを決心した。かくして、自分の時間を買うのを許してもらえなかったことが、わたしの逃亡の時期を早めたのだ。このとき、旅の準備をするためにあった時間は三週間であった。

いったん決心すると、わたしはある程度の落ち着きを感じ、月曜日には、主人ヒューがわたしのために仕事を探すのを待つので

はなく、夜明け前に起床して、跳ね橋の近く、シテイ・ブロックにあるバトラー氏の造船所に向かった¹¹。わたしはB氏のお気に入り、年の若さにもかかわらず、コーキングでは浮き足場での現場主任だったこともあった。もちろん、わたしは容易に仕事を不得、その週の終わりには——ついでに言っておけば、それは非常に順調な週であった——主人ヒューに九ドル近くを持って行った。わたしに良識が戻ってきたことを示すこうした兆候は目覚ましい効果をもたらした。彼は非常に喜び、お金を受け取るとわたしを褒め、前の週も同じことをしていればよかったとわたしに言った。暴君がその犠牲者の考えや目的を常にわかっているわけではないというのには喜ばしいことである。主人ヒューはわたしの計画がどのようなものか、ほとんどわかっていた。彼の許可を得ずに野外集会に行ったこと——彼の叱責に対してなされた尊大な返答——自分の時間を買う特権を奪われた翌週の不機嫌な態度——は、わたしが不忠な目的を抱いているかもしれないという疑念を彼のなかに呼び起こした。したがって、わたしが着実に働く目的は疑念を取り去ることであり、この点においてわたしは見事に成功した。わたしが逃亡を計画していたまさにそのときに上に、わたしが自分の境遇に満足していると彼が思う時期はおそろしくなかつたであろう。二週目が過ぎて、再びわたしはまるまる一週分の稼ぎ——九ドル——を彼に持って行った。彼は非常に喜んで、二十五セントもわたしにくれて、「それをうまく活用す

るんだぞ」と言いつけた。わたしが考えていたその利用法のひとつは、地下鉄道の乗車賃を支払うということであつたので、そうしますとわたしは彼に言った。

外面的な事態はいつでもどおりに進展していたが、わたしは二年前に経験したのと同じあの興奮と不安を味わっていた。あのときの失敗は、この二回目の試みの成功への自信を高めてくれるようなものではなかつた。そして二度目の失敗がもたらすのは、一度目の失敗がもたらした状況と同様であり得ないこともわかっていた——はるか北へと逃げるか、さもなければ、はるか南へと送られなくてはならなかつた。こうした状況に頭を悩ましていたのに加えて、ボルチモアの誠実で心の温かい友人仲間からもうすぐ離れることがつらさを感じさせた。再会の希望がなく、手紙のやりとりもできないそのような別れを考えるのは非常につらいことである。今でも奴隷制にとどまっている何千の人も、彼らとその家族や親類や友人たちに縛りつける愛情の強力な紐帯がなければ、そこから逃亡しようとするであろうというのがわたしの考えである。娘は母親に対して抱く愛情によって、父親は子供たちに対して抱く愛情によって逃亡を妨げられており、どこまでもそうなのだ。わたしはボルチモアに親類がおらず、兄弟姉妹の近所で生活できる可能性もなかつたが、友人たちから離れるという考えは逃亡に対する最大の障害のひとつになつていた。その週の最後の二日——金曜日と土曜日——は、旅のための所持品を手元を集めることにほとんど費やされた。主人のためにその週の四日間働いて、土曜日の夜に彼に六ドルを手渡した。日曜日を家で過ごすことはめつたになかつたので、行動になにかを嗅ぎつけられ

11 当時、ボルチモアの内港をシテイ・ブロックのブロック通りへと接続する跳ね橋があつた。

ないように、この習慣に従って一日中不在にした。一八三八年九月三日月曜日、決心したとおりに、ボルチモアの街と幼年時代から忌み嫌って来た奴隷制に別れを告げた。

どうやって逃亡したのか——どの方向を行ったのか——陸路か水路か——助けがあったのか、なかったのか——については、すでに述べた理由により、説明されないままではなくてはならない。

〔第一部 奴隷としての生活・完〕